

work life balance work life balance 経営者弁護士に聞く 法律事務所におけるワークライフバランス



飯島 歩 弁護士 (46期)

第1回

個々のモチベーションに依拠してワークライフバランスを達成している例

本企画は、ワークライフバランスを実現する取り組みを行っている法律事務所の経営者弁護士に、取り組みについてインタビューをするものです。

第1回目は、業務分野の選択や所内マインドセットの醸成、報酬体系の工夫等により個々の弁護士のモチベーションを引き出す事務所経営を行っている飯島歩弁護士（第一東京弁護士会）に伺いました。

男女共同参画推進本部委員 水谷 江利 (62期)

— 事務所のことを教えてください。

当事務所は、東京と大阪に2拠点を置く、2016年に設立した特許事務所とのパートナーシップ型事務所です。有資格者のうち13名が男性、女性が8名で、半数以上に中学生以下の子がいます。

— 事務所への時間的・場所的な拘束度合いは、どうなっていますか。

コロナ禍以前から、時間的・場所的な絶対的な拘束はありません。合理的な時間的範囲帯は携帯電話で連絡がとれるようにしているだけです。

— 拘束時間がないといいますが、報酬体系はどうしているのでしょうか。

最低保証額と歩合制の併用です。透明性重視で、働きに応じて歩合を積算します。歩合を社内で全部共有することで、誰かが得をしているという変な猜疑心をもたずに、家庭のために仕事を一定までにしたい人、バリバリ仕事したい人、お互いのライフスタイルを尊重できるようにしています。

— 個々のモチベーションにゆだねる歩合制。競争を促す要素もありますか。

競争的なぎすぎすした雰囲気は現状全くないです。各自のワークライフバランスの違いを、所得で帳尻を付ける。「平等」というより「公平」です。

— 子育てについては所員の間でどれくらい共有していますか。

男性も子育てに参加しなかったらいじめられるんじゃないかっていうくらい、子育てが当たり前の事務所です。所内ではしょっちゅう家庭や、子どもの

話をわいわいやっています。

— お子さんはすでに成人されたとのことですが、ご自身の体験からいうやりくりのコツなどありますか。

妻も他の事務所のパートナー弁護士です。苦労は確かに多かったです。お互い海外出張も結構ありましたし。要は「助け合おう」という気持ちを持つかどうかだけだと思います。もちろん、お互い自分のほうが「割を食ってる」みたいな感覚を持つことはありましたが、時に喧嘩をしながらも調整してきました。

— 殊に女性弁護士にとって、ワークライフバランスと営業は両立が難しい部分ではないでしょうか。

役割分担すれば男性にも制約は生じる話ですから、男女の問題ではないはずです。

配偶者と調整して宴席に出る機会を設けることも自分に対するある種の投資。一方、帰宅せざるを得ないなら、子どもを寝かせた後で勉強して、研究成果を記事にして出すのもとても大事な営業活動です。営業って、飲みに行くことだけではないですよ。

いずれにせよ、事務所から給料、歩合をもらうためにやる仕事と、将来に向けての投資ははっきり分けて意識すべきです。

— これを読んでいる方にアドバイスなどあればお願いします。

子育ての面から見ると、仕事は制約になりますし、仕事の面からすると子育ては制約になります。それを踏まえてキャリア形成と家庭内での役割とを、男女問わず考えていかなければなりませんし、配偶者と話し合うのが大切だと思います。